

ほんとうの自由

某日、私は自由教育協會の講演會に参りました。そして、片山伸先生の自由と云ふ事についてのお話を、たゞ、うつとりしたそれこそ自由な自分勝手な氣持ちで聽きました、その席を去つて、その講演をくりかへして味つて見ました。「ノート」にも何にもとらなかつたので何處迄が先生自身の仰せになつた事で、何處を自分がつけくはへたのかわからなくなりました。しかし、とにかく私は私の心で先生のお話を味ひました。もとより一部分を。今その斷片をつつて見やうと思ひます。

空氣は全く自由に無^た費で呼吸する事が出来る。誰にもとがめられず、誰とも争はずに吸ふ事が出来る、たゞ空氣を信じて安心して吸つてゐる。しかも一心不亂に吸つてゐる。一心不亂でなかつたら私達はずぐに窒息してしまふに違ひない。話をしてゐる時も、考へてゐる時も、實に私達は呼吸だけは一心不亂にしてゐる、意識もないで、争はないで、しかも一寸も休まずに、本當の自由はかういふものだ。いくら普通選舉運動が成功しても、勞働問題が解決しても、私達の心に、憎しみや、恨みや、人と人との轢り合ひのある間は私達の心は自由とは云はれない。本當の自由は、私達お互が信じ合つて、愛し合つて、丁度、空氣を無^た費で呼吸してゐる様な、そんなのんびりとした心持になるといふ事にある。これは、法律や富や、地位が興へ得るものではない。自由と放縱とは大變に違ふ。例へば、酒をのむ人がどうしてもやめられないといふのは、それは酒のために束縛されてゐる證據でよい人間である、本當の自由は自分の心が酒にとらはれず、之をやめる事の出来る所にある。私達は、道で行きあふ人に「やあ、今日は、君も人類だね」といつて挨拶をして通りはしらない、所謂路傍の人で、お互が他を妨げずに往來してゐる。たゞ滑稽なものを見れば、無邪氣に笑ひもしやう。悲惨なものを見れば「悲惨だ」と呼びもしやう。此處に自由な所がある。眞の自由は、人間の本心からわき出した愛の泉なので、その泉があふれ出してそして、あたりを濕^{うる}して行く。憎みも、恨みも、きり合ひも、その泉の中に皆、溶けてなくなつてしまふ、そしてお互が包擁^{うよう}し合つて、信じあつて、大きな息をついてのび〜と生きて行く、そこに、ほんとうの自由がある。私達の心の中には、人と争ふ氣分がある、人をゆるし得ない憎しみがわだかまる。そして私達は、私達の心をしぼる。信する事も愛する事も出来ないであせり、あえぐ。一心不亂にしてゐる呼吸の様に私達の心も信じ合つて愛し合つて、その中に一心不亂に生きて行く事が出来ればそれこそ眞に自由に相違ない。そのためには、いろ〜の法律も、權利の獲得も勿論大切な一助ともならう。しかしそれは何處迄も一助であつて、それが得られたからとて、すぐに、人の心が自由になるものぢやない。その助けを、うまく助手としてつかつて、自分達の心の憎しみや、れたみや、うらみが消えて行けばこそ初めて甲斐があるので、そうでなしに、そうした權利の獲得がかへつて、人の心をこらす様では、その人にとつてはその權利を得たためにます〜不自由になつた事になる。健康な人は、身體のある事をしらない。知らないからそれでは、その人の身體の諸機關は運轉してゐないかと云へばそうぢやない。一心不亂に實に一心不亂にはたらいてゐる。それが意識ののぼつて来る時こそは、かへつて其機關が一心不亂でなくなつた時である。

自由とは、ほんとうの自由とはかう云ふものである。らく〜とのびて、信じて生きて行く心の状態、しかも一心不亂に。私達は決して外的に自由を求める事は出来ない。(T子)